

ドイツ電撃戦が生んだ森林伝説



アルデンヌの ARDENNES 真相

文=河合秀郎

■連合軍崩壊の謎

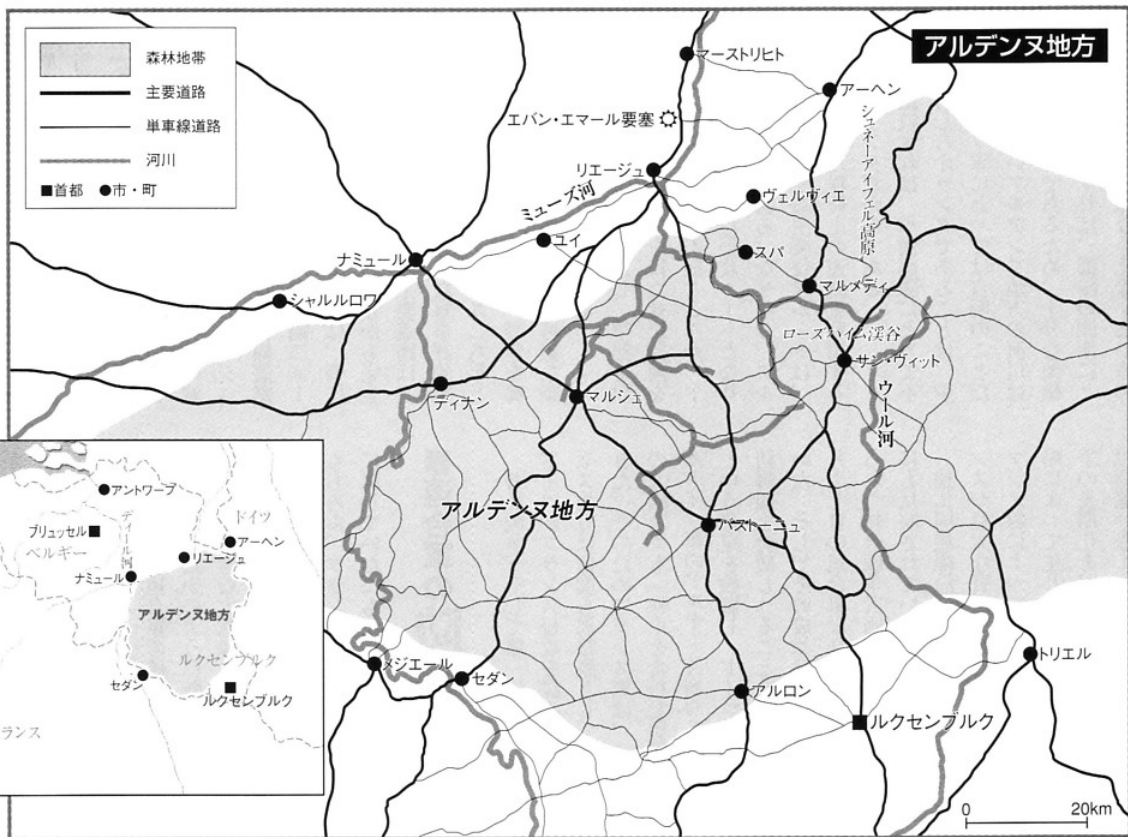
一九四〇年五月十日、ドイツ軍は対仏英戦の火蓋を切った。二手に分かれたドイツ軍機械化集団は、空挺部隊が確保した要塞や橋梁を突破してベルギーとオランダを蹂躪。フランドル地方の大半は二個軍集団か

らなるドイツ軍に席卷され、オランダはわずか五日間で降伏した。そして五月二十日、アルデンヌ地方を通過して西方へ突進していたドイツ軍機械化部隊の一部は、ついにソムム河口付近で大西洋岸に到達した。その結果、実に四〇万以上ものフランス、イギリス、ベルギー、オランダの諸軍をフランス本土から完全に分断することに成功し、孤立状態へと追い込んだ。

このとき包囲された連合軍部隊のうち、およそ三四万の将兵は、重装備を捨て、ほとんど身ひとつの状態ながら、海上ルートでの脱出に成功していた。実際に降伏したのは、主にオランダ、ベルギー、フランス軍からなるわずか一〇万ほどにすぎなかったのである。

しかしそれでもなお、ドイツ軍によるこの包囲環の形成と連合軍の脱出行は、空前の大破局と呼んでさしつかえない損害をもたらした。連合軍は包囲環の形成過程で数十万が潰滅し、それとほぼ同数が潰走していた。包囲環に取り込まれた戦車、火砲などの重装備はことごとく失われ、輸送車両はタンケルクの海岸まで将兵を撤収させた後、すべて置き去りにされた。莫大な損失であり、自力での回復などとうてい不可能な数字だった。

従来の「常識」によれば、このドイツ軍にとつての空前の快撃、連合軍にとつての決定的大破局は、連合軍の防衛計画それ自体が内包する致命的欠陥、本質的な部分に巢食っていた盲点がもたらしたものであった。



双方にとって共通認識であったはずの「機械化部隊にアルデンヌの森は通過不能」という常識をドイツ軍だけが克服し、そこから主力の機械化集団を突破させた。連合軍はそれに対してほとんど備えらしい備えを用意していなかった、というのである。

が、それでは、一体いかなる理由によって「通過不能」が「通過可能」へと変わったのだろうか。その点については、意外なことに筋の通った説明がなされていない。ドイツ側にはこれといったトリックがあったわけではなく、連合軍側の、それも主としてフランス軍の不注意、身のほど知らずの油断とされているのである。

一九四四年に連合軍の反攻で奪回され、再びドイツ軍が侵攻し、その後は連合軍のラインラントへの主要な侵攻路となったアルデンヌ地方。第二次大戦中だけで計四回も戦場となったこの地を、一九四〇年までのフランス軍は、なぜか「通過不能」と判断していたといわれる。その通説の裏には、意外な事実が隠されていた。

■ 通過不能の実態

ベルギー南東部からルクセンブルク北部にまでおよび、西側を大きく蛇行するミューズ河によって遮られたアルデンヌ地方は、ベネルクス諸国とフランス、そしてドイツの接点に位置し、古くから交通の要衝として知られていた。「アルデンヌの森」あるいは「アルデンヌ高原」、「アルデンヌ渓谷」

などと呼ばれてはいるが、特定の地形に代表されるような、険峻な地域ではなく、房総半島がすっぽり収まるほどの面積に、森林に覆われた丘陵と東西南北に貫流する大小の河川、それらの河川を縁取る渓谷など、車輛交通の障害物が幾重にも屏風のように交錯し、その隙間を縫うようにして数本の幹線道路が走っていた。森林であり、高原でもあり、同時に渓谷でもある、それがアルデンヌ地方だった。

こうした地形的特徴は、とくに北東部のシュネーアイフェル高原やその南に連なるローズハイム渓谷で顕著だった。ドイツとベルギーの国境に平行して南北に伸びるアイフェル高原は、その稜線の多くが森林によって完全に遮蔽されていた。ライン、ミューズなどの支流の水源地帯でもあるため、それらの小河川が濤のように丘陵の麓を取り巻き、道路と橋梁以外を車両が踏破することはもちろん、馬匹に牽引された砲兵などが路外へ移動、展開することもはなはだしく困難だった。

さらに厄介だったのは、幹線道路から枝分かれし、この地方全域をカバーしていた袋小路を含む多数の単車線道路の存在だった。そうした枝道は未舗装道路が多く、当然それらは、季節によっては泥濘と化した。道路路それ自体が交通の障害となる可能性を持っていたのである。

こうした複雑な地形は、機械化された大軍が通過する場合、文字通りの障壁となる可能性がある。全体としては、車両の通行

を阻む要素がテノ盛りになった地形であり、原則論だけでいえば、確かに通行を避けて当然かもしれない。

しかしそれでも、アルデンス地方が車両部隊にとって通過不能な地形である、などという話は幻想でしかない。フランスの城塞都市セタンやミューズ河畔のリージュ、ナミュール、ディナンなどに至る幹線道路は、当時ドイツ軍が保有していた幅二メートルから三メートルの戦車であれば、楽に通行できるだけの幅員を持ち、しかも完全に舗装されていた。これらの主要道路は、

イギリス軍の退役将校で著名な軍事評論家でもあるリデル・ハートが、一九二八年と三八年の二度にわたって実見し、警鐘を鳴らしたように、機械化集団が利用可能な条件を十分クリアしていたのである。

つまり進撃路を慎重に選定し、季節を限定した上で、十分な余裕を持たせた計画を準備しさえすれば、通行不能どころか、ドイツ軍にとって理想的な侵攻ルートとなりうる、ということである。なぜなら、アルデンス地方と対置する主要侵攻ルートは、水路で寸断された堤防上の道路を利用するしかないオランダだからである。

両者を比較すれば、車両部隊にとって不利なのがむしろオランダであることは、少なくともドイツ軍にとっては自明のことだった。幅員が狭いアルデンス地方の河川は、対岸の制圧が容易であるため、十分な架橋資材を確保しさえすれば、部隊の渡渉によって致命的な障害とはならないというの

が、当時のドイツ軍においては一般的な見解であり、前提だったのである。

ところが通説は、こうした知識をドイツ軍だけのものであるかのように説明し、あたかもそれが連合軍の破滅的敗北の最大の原因であったかのように断定してきた。「機械化部隊を含む大部隊にアルデンス地方が通過可能である」ことは、すでに開戦の前年、すなわち一九三八年の段階で、独英はもちろん、フランス軍の間でも常識の範疇に属していたにもかかわらず、である。

■連合軍の防御計画

普仏戦争、そして第一次大戦と、過去にドイツがフランス侵攻を試みた際、アルデンス地方は何度も進撃路として利用されてきた。そのためフランス軍は、一九三八年の大演習でも「戦車を含む七個師団からなるドイツ軍のアルデンス通過とセタン攻撃」という想定を検証し、ドイツ軍が連合軍の防御線を突破しうることをすでに確認していた。そしてその成果は、一九三九年十一月十七日の連合軍最高戦争指導会議で定められた統合戦争計画「ディール・プラン」にも反映されていた。

独仏国境線沿いのロレーヌ地方は、フランスが莫大な費用を傾注して建設した要塞マジノ線によって防御されていた。要塞攻略によって生じるであろう多大な損害と戦争の長期化を回避するためにも、ドイツ軍は間違いなくマジノ線を迂回するはずで、

フランス侵攻は必然的にオランダ、ベルギー、ルクセンブルクを経由するものとならざるをえない。つまり英仏連合軍は、ドイツ軍のこれら三国への侵攻と同時にオランダ、ベルギー両軍との共同作戦へと移行し、両国の防衛に協力するだけで、ドイツ軍のフランス侵入を完全に阻止することが可能だったのである。

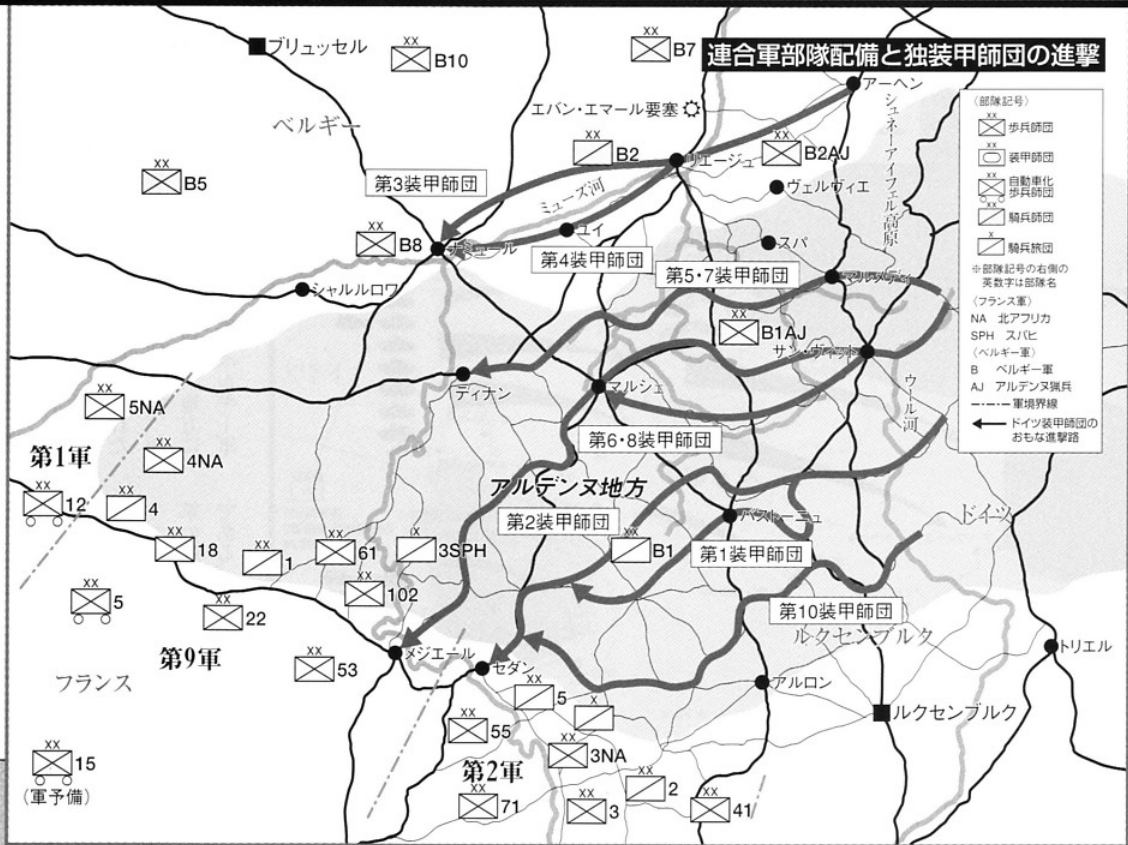
共同作戦の具体的な青写真とは、各国独自の国防計画をそれぞれ包摂する形で成立していた。大都市が集中する国土の南西部、オランダ要塞への大規模な戦術的後退を前提とするオランダ、エバン・エマール要塞とワール河防衛線を中核に持久防御を展開するベルギーを第一線とし、英仏連合軍はその後方、ベルギー中部のディール河とミューズ河に沿ってオランダ要塞からセタンにいたる主抵抗線を設定し、主力の大半をこの地域に進出させるといったものだった。

そしてアルデンス地方からミューズ河にかけて展開した部隊がドイツ軍の左フックの衝撃を段階的に吸収し、オランダ要塞からディール戦線にかけて集結した主力が右ストリートを受け止めつつクロスカウンターを浴びせる、つまり第一次大戦の主戦線よりも三〇〇キロメートルほど東でドイツ軍を迎撃し、大出血を強要した後に反撃に転じるわけである。

この作戦を担当する第一軍集団は、イギリス海外派遣軍(BEF)を含む五個軍で構成されていた。最北に位置する第七軍はオランダ西部、BEFと第一軍はベルギー

軍主力が展開するディール戦線の両翼、第九軍と第二軍はミューズ戦線を担当することになっており、その総兵力はオランダ軍一〇個師団、ベルギー軍二二個師団を含めれば、実に七六個師団にもなった。合計五個軍で構成されていたドイツ軍の二個軍集団、七四個師団に対して、十分対抗できるだけの規模に達する予定だった。多数の重戦車と大兵力をディール河からミューズ河にいたる抵抗線に集中することで、ドイツ軍を消耗戦に引きずり込み、攻勢を頓挫せしめるという狙いは、単純な兵力比の上では、すでに保証されたようなものだったのである。

問題となるのは、前年のポーランド戦で実証されたドイツ軍機械化集団の機動力に、第一軍集団がどう対抗するかだった。機動力と輸送力を集中する必要があるためである。通説が指摘する通り、ドイツ軍に対する連合軍主力の機械化部隊含有率は、師団固有の編制で比較するときはほどではなく、装甲師団などへの戦車の集中度では大きく劣っていた。とくにフランス軍の場合、ドイツ軍のような一点豪華主義的集中はほとんどなされておらず、歩兵支援のための独立戦車大隊三十数個には、機械化師団全体の保有車輛数を大きく上回る戦車が配備されていた。さらに肝心の装甲師団にいたっては、フランス軍のそれは三個がようやく訓練を完了したばかりで、第四装甲師団は編成中、イギリス軍は第一装甲師団のフランス派遣を決定したばかりだった。

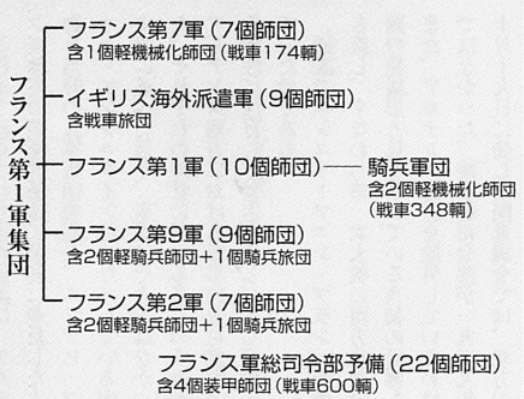


連合軍部隊配備と独装甲師団の進撃

(部隊記号)
 XX 歩兵師団
 XX 装甲師団
 XX 自動車化歩兵師団
 XX 騎兵師団
 XX 騎兵旅団
 ※部隊記号の右側の英数字は部隊名
 (フランス軍)
 NA 北アフリカ SPH スパヒ
 (ベルギー軍)
 B ベルギー軍
 AJ アルデンヌ猟兵
 --- 軍境界線
 ← ドイツ装甲師団のおもな進撃路



フランス北部の連合軍編制図



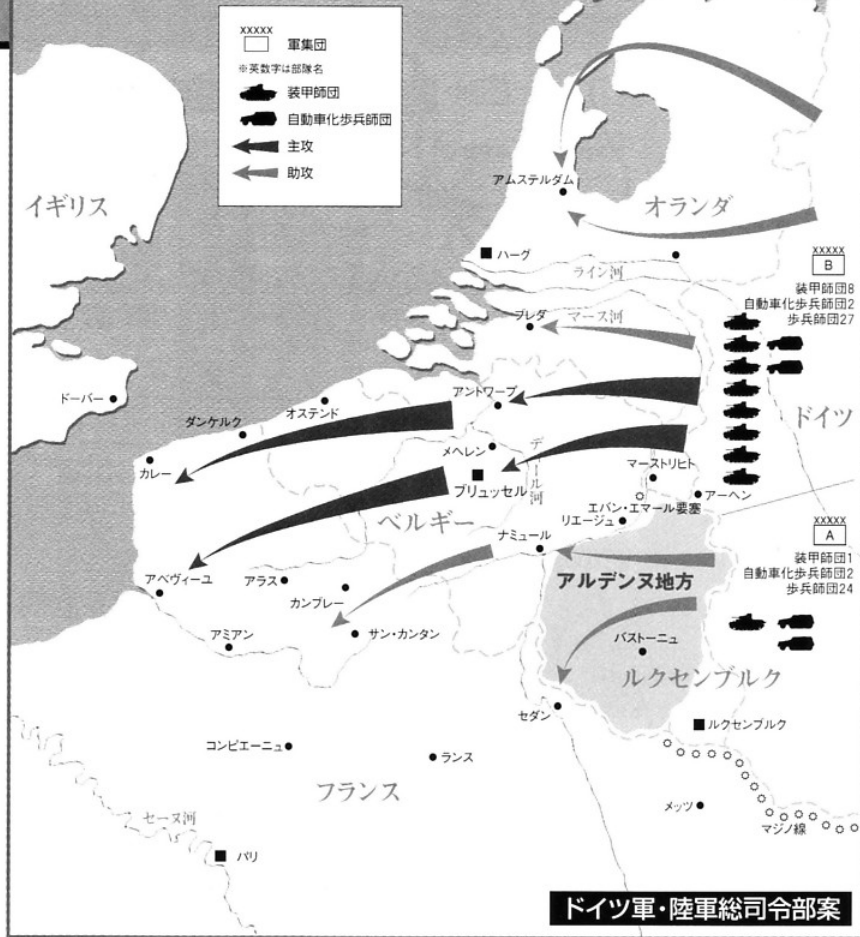
それでも軍団や軍のレベルでは、英仏軍の車両の保有総数はドイツ軍のそれを凌駕しており、決して見劣りのするものではなかった。第1軍集団にはフランス軍機械化

部隊の大半、すなわち軽機械化師団三個、自動車化歩兵師団六個、半機械化の軽騎兵師団四個、戦車大隊一〇個と、自前の輸送部隊を持つ B E F のほとんどすべてが所属していた。しかも第1軍集団の背後には、装甲師団四個、自動車化歩兵師団一個、歩兵師団一七個、独立戦車大隊二個などからなるフランス軍総司令部予備が控置されていた。つまりフランス北部に展開する連合軍主力には、歩兵支援を主任務とする戦車大隊を除き、フランス軍機械化部隊がことごとく配属されていたのである。

ディール・プランには一九三八年の大演習の結果も完璧に取り入れられていた。フランス軍はアルデンヌに展開するであろうと自らが想定したドイツ軍七個師団に対して、第9軍と第2軍の合計二二個師団をミューズ河の線に張り付ける予定だった。仮にドイツ軍が予想以上の兵力を指向し、アルデンヌ地方を主攻正面にしていたとしても、自動車化師団一個を含む二二個師団がミューズ河沿いにアルデンヌ地方をすっぽりと包囲することになる。

しかも、第9軍と第2軍は、これらミューズ河の線に張り付ける予定だった。仮にドイツ軍が予想以上の兵力を指向し、アルデンヌ地方を主攻正面にしていたとしても、自動車化師団一個を含む二二個師団がミューズ河沿いにアルデンヌ地方をすっぽりと包囲することになる。

しかも、第9軍と第2軍は、これらミューズ河の線に張り付ける予定だった。仮にドイツ軍が予想以上の兵力を指向し、アルデンヌ地方を主攻正面にしていたとしても、自動車化師団一個を含む二二個師団がミューズ河沿いにアルデンヌ地方をすっぽりと包囲することになる。



れる予定だった。そしてミューズ戦線やリエージュ要塞の守備部隊まで含めれば、アルデンヌ地方に展開される兵力は二四個師団にも達した。ポーランド戦に投入されたドイツ軍の総兵力は五〇個師団余りで、仮にそのすべてをそっくりアルデンヌ地方に投入しえたとしても、第一線のベルギー軍、

第二線のフランス軍騎兵集団の段階的な抵抗でドイツ軍機械化部隊の突進力は漸減され、ミューズ渡河の足並みは大きく乱れることになる。そして水平爆撃と砲撃、ミューズ河の水際陣地線の火力によってドイツ軍の進撃は完全に阻止されるはずだったのである。

このように、連合軍は「通過不能のアルデンヌ」を無防備に開放していたわけではなかった。アルデンヌ地方を軽視するどころか、二重三重に守りを固める計画だったのである。従来流布されてきた通説、連合軍はドイツ軍機械化部隊のアルデンヌ通過をまるで予測していなかった、などという戯れ言は、まったくの虚構でしかなかったといっても過言ではない。

ドイツ軍の攻勢計画

これまで流布されてきた通説は、アルデンヌ地方の戦略的価値に最初に着目した人物を当時のA軍集団参謀長、エリッヒ・フォン・マンシュタインだったとしているが、すでに述べた通り、事実はそのようではなかった。それぞれの陣営に属する多くの人々がアルデンヌ地方における軍事的な可能性と危険性に注目し、警告を發し、そして備えていたのである。

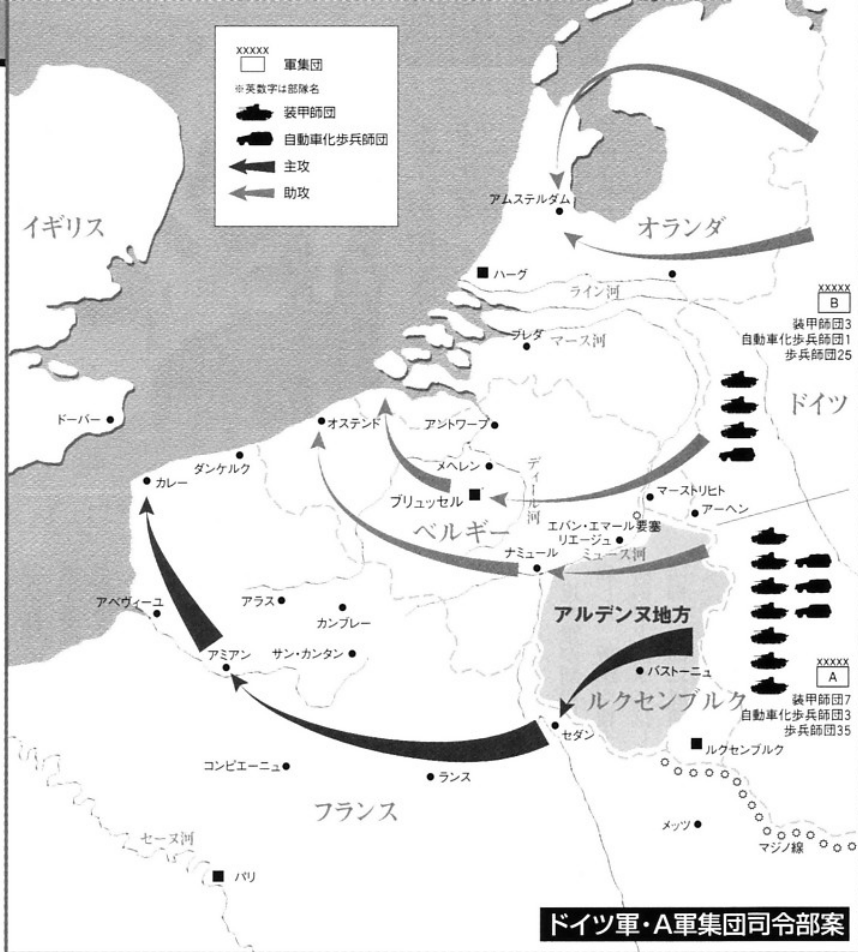
通説で「シユリーフェン・プラン」の焼き直し、すなわち第一次大戦の西方攻勢計画の発展形と見なされている当初の計画もまた、アルデンヌ地方を除外していたわけではなかった。陸軍総司令部が一九三九年十月十九日に發した開進訓令では、北方のB軍集団が主攻兵力としてオランダとベルギー北部への侵攻を担当していたが、その南のA軍集団はアルデンヌ地方を含む戦区区域での助攻を担当していた。アルデンヌを突破してナミュールとセダンの間でミューズ河を渡り、マジノ線とその北方に進出した連合軍の間に楔を打ち込むことで連合軍を牽制、主力のB軍集団を支援するというのがその役割である。南の楔で敵を南北に分断し、その破口に敵予備兵力を吸引することで、北より強大な楔による連合軍北翼部隊の殲滅とオランダ、ベルギーの制圧、そして機械化集団の海峡沿いの迅速な迂回運動を達成する。確かにシユリーフェンの色彩の濃い計画ではあったが、この計画においても、アルデンヌ地方からの侵入は重要な意味を持っていたのである。

つまりマンシュタインの主導で十月三十一日にその原型が提示されたA軍集団司令部案は、連合軍主力の包圍殲滅が南と北のどちらでなされるかという最大の違いを除けば、陸軍総司令部案の二つの矛、A軍集団とB軍集団の役割を置き換えたことで、アルデンヌ地方の重要性を結果的に増大させただけのものではなかったのである。

しかもA軍集団司令部案は、最終的に期待できる大戦果に比べて、^{あがた}購いきれないほどの大きなリスクをともなっていた。北方のB軍集団を主力とする陸軍総司令部案の場合、連合軍主力を押し戻すだけの結果になったとしても、海岸によって右翼の安全が保障されている。これに対して、連合軍の中央を突破しなければならぬA軍集団司令部案では、連合軍主力が南方との連絡を維持しようと兵力を転用した場合、ドイツ軍の大きいほうの矛であるA軍集団は連合軍の挟撃によって切斷され、押し潰され

る危険性があった。
ドイツ軍が抱え込むことになるはずのリスクは、A軍集団司令部案のほうが明らかに大きなものだった。そして連合軍は、ドイツ軍がそのようなリスクを許容するとはまったく予想していなかったものの、アルデンヌ地方の守りを手薄にしていたわけ

はなかった。無難な陸軍総司令部案と大博打になりかねないA軍集団司令部案は、一長一短の違いこそあれ、連合軍が守りを固めるアルデンヌ地方を突破する必要がある点で、似たようなものでしかなかったのがある。
ところが、そのハイリスクな計画が、一



ドイツ軍・A軍集団司令部案

九四〇年二月二十日になって、にわかにも採用となる。中途半端な陸軍総司令部案への修正に批判が集中し始めた一九四〇年一月十日、ベルギー領内メヘレンに不時着した第7航空師団の参謀将校が、所持していた第1航空軍の作戦計画書の焼却に失敗、その一部がベルギー軍の手に落ちた疑いが発生したのである。

それまでの計画が連合軍側に漏れたことで、ヒトラーは逆に敵の意表を衝ける可能性が生まれたと判断、陸軍総司令部案は葬り去られ、マンシュタインが主導したA軍集団司令部案が新たな作戦計画として採択された。A軍集団には装甲師団七個、自動車化歩兵師団三個、自動車化歩兵連隊一個が集中され、師団総数は一躍倍増して四五个となった。削減されたB軍集団も二九個師団を維持し、四二個師団に達する戦略予備兵力も合わせれば、攻勢正面には実に一六個師団が集中されることになったのである。

しかしこれだけの集中がなされても、B軍集団の師団数はオランダ軍に対して三倍弱、A軍集団の第一線師団数はベルギー軍に対して九倍弱にすぎず、いずれの敵も準備された陣地か地形的優位を盾にしていた。

英仏連合軍が短時間に進出してくるようであれば、突破後のリスク以前に、ドイツ軍の攻勢は初動で躓いてしまう可能性があった。なぜなら、ベルギー軍はメヘレン事件で確かにドイツ軍の作戦計画書の一部を手手していたが、連合軍はこれを謀略とみな

し、アルデンヌ方面の防備をそれによって手薄にしたことなどなかったからである。

■アルデンヌ突破

アルデンヌ地方での戦闘は、五月十日に始まった。突破口開設を担当するA軍集団のドイツ軍歩兵部隊の猛攻によって、国境付近に展開していたアルデンヌ猟兵二個師団と騎兵二個師団からなるアルデンヌ地方のベルギー軍はわずか一日で制圧され、ウール川の渡河点と橋梁はドイツ軍の手に落ち、機械化部隊の進撃路が確保された。

しかし、ベルギー軍は十分に健闘していた。ドイツ軍の計画では、進撃路の確保を半日で達成する予定だったからである。そしてこの結果は、連合軍上層部にとってもそれほど意外なものではなかった。ベルギー軍の第一線での抵抗は二四時間程度が限界と予測されており、そのために第一軍集団の予定抵抗線への進出は、四八時間以内で完了される予定だった。そして実際には第一軍集団の大半は最初の二四時間で指定された陣地に展開を終え、休息と戦闘準備に取り掛かっていたのである。

問題は、その後のドイツ軍機械化部隊の進撃速度だった。翌十一日、歩兵師団群に代わって軍集団の先頭に踊り出たドイツ軍機械化部隊の行軍速度は、連合軍の予想を大きく上回っていた。長さ一〇キロメートルにも及ぶ七本の行軍縦列は、要所に配置された交通統制官の誘導により、アルデン



ゴムボートでミュース河を渡河するドイツ兵

又地方を東西に横切る大小の道路で渋滞することなく、わずか一日半で走り抜けた。アルデンヌ地方に進出していたフランス軍騎兵部隊は、機動中にドイツ軍装甲師団の先遣部隊と遭遇して蹂躪され、跡形もなく粉砕された。

この瞬間、連合軍はドイツ軍の進撃を阻止する最初の機会を失った。ほとんどの装甲師団は、十二日のうちにミュース河東岸に到達していたからである。しかし彼らはまだミュース河を越えたわけではなかった。

セタンからナミュールにかけての七か所でミュース河岸に進出したA軍集団の装甲

師団は、翌十三日午後には敵前渡河を強行したが、ほとんどの渡河点はすでに配置に就いていたフランス第9軍と第2軍によって固められていた。ドイツ軍は早朝からのフランス軍の阻止砲撃に悩まされ、各部隊の進出は大幅に混乱、遅延することになった。

しかしドイツ軍装甲部隊の墓場と化す可能性さえあったミュース戦線というバルジ(突出部)の内側は、航空攻撃からドイツ軍装甲部隊の縦列を守り、逆にフランス空軍が対空兵器の餌食となる一因となった。それまでの常識を覆す濃密な対空砲火とドイツ空軍戦闘機部隊の激撃によって、連合軍は制空権を失った。そして制空権の喪失を想定していなかった連合軍にとって、十二分に強力だったはずのミュース河の水際防衛部隊は、一転して配置に就いていた部隊を拘束する足枷となった。連合軍戦闘機部隊はアルデンヌ上空での消耗戦で迎撃能力を著しく減じ、航空支援を命じられたドイツ軍急降下爆撃機部隊は妨害を受けることなく飛来、対空装備をろくに持たないミュース西岸のフランス軍砲兵陣地を制圧した。

連合軍が制空権を喪失すると、戦況は一変した。敵制空権下における海岸での水際防衛が上陸軍に抗しえないと同様、水際防衛のために展開していたミュース戦線の連合軍部隊は、熾烈な爆撃で連絡線を寸断され、相互の連携と機動力を奪われてしまったのである。

航空支援の傘の下で敵前渡河を強行したドイツ軍は、敵地上部隊にまったく妨害さ

れることなく橋頭堡を確保し、多くの部隊が戦車の進出を待たずに進撃を再開した。この強引な前進も反撃の好機だったのだが、ミュース河に直接張り付いていたフランス軍部隊の多くは、水際陣地を離れる前に包囲され、各個撃破されてしまった。戦術的に縦深の浅いフランス軍のミュース戦線は、渡河されてしまうと逆に包囲の餌食でしかなかったのである。

しかも、こうした場合に半機械化の打撃部隊として投入できたはずの軽騎兵師団はすでにアルデンヌで潰走し、フランス軍が控置していた予備部隊の多くは、機動的な反撃を行うことができなかった。戦略予備から第1、第3、第4装甲師団が反撃に投入されたものの、七か所の橋頭堡に三個師団では焼け石に水でしかなかった。

交通の要衝を制圧されたということは相手に機動の自由を与え、各個撃破の機会を与えることになる。敵を包み込むように展開している外線側にすれば、相手にいわずの内線の利を与えてしまうわけで、逆に味方は此細なミスが各個撃破という致命的な結果を引き起こしかねない。ミュース戦線を突破してしまった連合軍を待ち受けていたのは、まさにそうした事態だった。

ミュース戦線を蹂躪したドイツ軍装甲師団は、凄まじい勢いで突進を開始し、ドイツ戦線の側面をすり抜けた。その後方にはわずか三個の自動車化歩兵師団が続き、はるか後方に取り残された歩兵師団や戦略予備の第12軍との間をころうじて封鎖して

いた。A軍集団司令部や陸軍総司令部、はてはヒトラーまでが、この計画の最大のリスクである連合軍の反撃に脅え、機械化集団の突進を抑制しようとした。

が、ドイツ戦線の連合軍部隊は前面のB軍集団からすぐに離隔できず、防衛的観点からすれば大きな効果が期待できるはずだったフランス軍総司令部予備兵力の大半は、この肝心なときに当初の予定通り第一軍集団に配属され、ドイツ戦線後方を前線に向かって行軍中だった。無防備な縦列を組んで移動するそれらの部隊の多くは、セタンとワールの間を突破したドイツ軍機械化集団によって次々と切り裂かれ、ドイツ軍急降下爆撃機の餌食となって粉砕された。フランス軍総司令部は、最も必要とされた瞬間に連合軍予備兵力を払底させたばかりか、その大半を無為に潰滅させてしまったのである。

それでも連合軍は、十四日から二十一日にかけて、各地で機械化部隊による反撃を繰り返し、ドイツ軍上層部が最も恐れていたA軍集団の切断を試みた。海峡に到達した直後のドイツ軍は、包囲環に十分な兵力を展開できないでいたため、連合軍の反撃はヒトラーや陸軍総司令部、A軍集団司令部などを恐慌状態に陥れ、機械化部隊に対して繰り返し停止を命じるという事態を引き起こした。しかし戦車の質、量において勝っていたはずの仏英の機械化部隊は、分散投入によって数の優位を發揮できず、頼みの綱の重戦車も高射砲や野砲の直射を浴

びて撃破され、ドイツ軍に苦戦を強いながらも敗退した。

ミューズ河を突破された時点で勝機を失っていた連合軍は、A軍集団の分断に失敗した時点でついには打つ手を失った。海峡地方に孤立した第一軍集団主力とベルギー軍主力、そしてオランダ軍の残存部隊は、陸路での脱出路を失ったことで早期の戦線復帰は絶望的となった。フランス軍は必死に戦線の再建を試みていたが、パリ北方に展開する兵力は絶望的なまでに不足しており、すでに敗北は決定的なものとなっていた。

■伝説が歪めた敗因分析

連合軍は「アルデンヌが通過可能」であることを承知し、それを前提に計画を立案しながら、肝心の実行段階で生じた未知の事態、大戦間に重要性が飛躍的に向上した制空権や対空能力、予備や前線の部隊の機動的運用にドイツ軍ほど巧妙に対応できず、それによって戦況を好転できるはずの機会を次々に逸した。そうした未知の躓きゆえに、ドイツ軍のアルデンヌ通過を阻止しえず、ミューズ河突破を阻止しえず、A軍集団をその最も脆弱な瞬間に分断しえなかったのである。そしてそれらの失敗の影響は、単に一面の戦況に止まらなかった。

アルデンヌ地方から雪崩れ込んだドイツ軍機械化部隊を封じ込める機会を次々に逸したことで、連合軍は包囲環の形成と強化を拱手傍観することになった。未知の要素

新たな概念を予測できなかったことで、既知の概念では十分妥当だったはずの連合軍の防御計画「デイル・ブラン」は、自らを文字通りの致命的な一撃に晒し、フランスの戦争を屈辱的な終幕へと導き、イギリスを本土攻撃の恐怖に脅えさせることになったのである。

こうして生じた破滅的結果に対して、英仏政府は素早く責任を回避した。当時の内閣はいずれも戦争直前になって成立したもので、戦時体制移行の遅れはそれまでの政権に責任転嫁された。事実、フランスのマジノ線偏重と機械化部隊整備の遅れは、当時のポール・レイノー内閣の責任ではなかった。装甲師団や軽機械化師団、軽騎兵師団の編制上の欠陥や、マジノ線への過剰な部隊配備、そして戦略予備の不足は、軍上層部に帰されるべき問題だったからである。

必然的に責任追及の矛先は連合軍上層部とくにフランス軍総司令部に向けられることになったが、こうした動きは外交問題でもあった。イギリスのフランス軍に対する批判は国策の規模で展開され、上は首相のチャーチル自身から下は各部隊の指揮官にいたるまで、広範囲にわたって繰り広げられた。チャーチルは『第二次大戦回顧録』に「戦略予備の払底を知らされた瞬間の驚愕」を記し、軍団長として参戦していたブルックや師団長だったモンゴメリーは、「作戦行動の遅延」や「諸兵科の連携不足と装備の不均衡」などを批判した。そしてその中で次第にクローズアップされるように

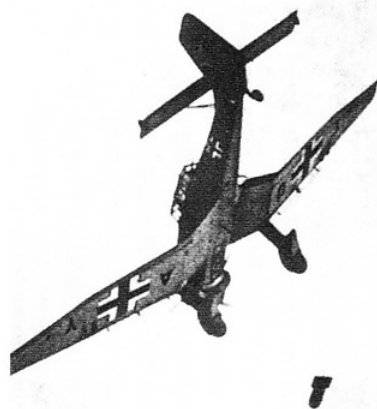
なったのが、フランス軍の「アルデンヌ地方軽視」だった。

連合軍の敗北が直接的にはドイツ軍機械化集団のアルデンヌ侵攻に起因することは、確かに事実ではある。しかし繰り返した述べた通り、英仏の軍人は開戦前からそれを予想し、その対策をそれなりに準備していた。問題があるとすれば、それらが予想以上の大軍がアルデンヌに押し寄せたばかりか、個々の局面でタメージコントロールが十分に機能せず、突破を阻止しうる数度の機会を掴み損なったことにある。

イギリス側はその責任をフランスに押しつけ、フランス側は「部の頑迷な老人たち」に仕立て上げたベタン元帥らに押しつけようとした。ベタン元帥やガムラン將軍の言動は多くの場合、部分的な引用や意識によってはなはだしく歪曲されているが、それらのほとんどはこうした経緯で誕生した。

一方、ドイツ側でもフランス降伏直後から宣伝が始まっていた。アルデンヌ突破という着想の大胆さを強調し、その前身である陸軍総司令部案は「シユリーフェン・プラン」の中途半端な模倣として徹底的に否定された。そしてそれらは、戦後になって連合軍側の責任転嫁的言説と結びつき、次第に強化されていったのである。

かくしてアルデンヌ地方は、ドイツ軍と連合軍の双方にとって、自己宣伝や自己弁



急降下爆撃を敢行するJu87「スツカ」。電撃戦における空の立役者であった。

護の舞台として重視され、その価値が暴騰することになった。そしてそれらは、時間の経過とともに様々な伝説を生み、誤まった敗因の分析を生むことになった。連合軍がドイツ軍のアルデンヌ地方からの侵攻を予測していなかったとか、そこからの侵攻が奇襲効果を生じさせたという説も、ドイツ軍の自画自賛や連合軍の自己欺瞞が生んだ伝説、歪んだ幻想でしかなかったのである。

連合軍は奇襲に敗れたわけではなく、ドイツ軍のアルデンヌ地方の通過が奇襲に結びつくこともなかった。連合軍の崩壊は、アルデンヌ地方からミューズ戦線にかけての戦闘で生じた、小さな蹉跌の積み重ねによってもたらされたものであり、それはつまり、臨機応変に障害を克服したドイツ軍との相対的な柔軟性の差、そして新たな戦闘形態への適応能力の差によってもたらされたものだったのである。